

平成30年度

# 研究だより 秋号

附属光学園

山口大学教育学部附属光小学校・中学校



## 一貫教育において 求める子どもたち像

6月29日(金)の研究発表大会では、たくさんの先生方に御参会いただき、ありがとうございました。

研究だより秋号では、そのときの様子をお伝えいたします。今後とも御指導御鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



**知性**

知を愛する

**自己**

生活を拓く・  
自己を活かす

**共生**

共にある

〒743-0007 山口県光市室積8丁目4番1号

小学校 TEL(0833)78-0124・FAX(0833)78-1507 URL <http://www.hikari-es.yamaguchi-u.ac.jp>

中学校 TEL(0833)78-0007・FAX(0833)75-1509 URL <http://www.hikari-jhs.yamaguchi-u.ac.jp>

小学校・中学校 URL <http://hikari-gakuen.edu.yamaguchi-u.ac.jp>





小学校 1年1組 住江 めぐみ

## じぶんたちのかくれんぼと くらべてよもう ～「うみのかくれんぼ」～

自分たちのかくれんぼと比べることで、内容のイメージを膨らませることができた。低学年の子どもが、形式にも着目できる工夫を考えていきたい。



中学校 2年3組 作花 麗美

## 「生物が記録する科学 ーバイオリギングの可能性 佐藤克文」 (光村図書2年)

本教材文は、「バイオリギング」という調査方法を提示する文章であるが、事例として挙げられているペンギンの話は人間の目による観察から考察が書かれていることに着目させ、事例選択が適切なのか考える過程で、筆者の主張に思考を戻していきたいと考えた。

事例がなぜ述べられているかを問い直すことで、その妥当性や役割を理解し直すことができた。教材と発達段階に応じて、「～し直す」視点で、ことばにより見方・考え方を働かせることができるのではないかと考える。同じ視点での小中の授業を重ねていくことで、9年間の学びがつかめるのではないだろうか。



小学校 4年2組 田中 章憲

## どんな「しかけ」をしようかすれば、 物語のみりよくが伝わるのかな？ ～「世界一美しいぼくの村」～

読後感と「しかけ」を関連付けて読むことで、物語のもつ魅力を捉え直すことができた。発達段階に応じた教材文の対象化が、今後の課題である。



中学校 3年3組 吉田 充寿

## 「常套的な表現」

4月、皆が学級掲示に書いた級友へのメッセージには「一年間よろしくお願ひします」という言葉がずらりと並んでいた。言葉だけ見れば一様に無個性なメッセージである。しかし、本時では、その言葉に抱いていたイメージが一人一人違うものであることを探った。

言葉の働きを自覚することが、言語活動の質を高めるのではないかと考えて構想した授業だった。振り返りでは「言葉は、書いてあることだけでなく、それが書かれた背景や、書いた人が読む人に察してほしいことも伝えていると思う」と書いた生徒もいた。こうした気づきを、次にどう繋げるかが課題である。



# 算数・数学科

中学校3年2組 將基面 裕介

## 「平方根～有理数と無理数～」

本授業では、 $1/n$ の循環節の長さや分母に着目して数量の関係を見出す活動を通して、分数が必ず有限小数か循環小数になる理由を考えることをねらいとし、授業を行った。

数の表を見て、累乗や素数などに着目して、有限小数か循環小数になる理由を考え、子どもが自分の意見を自分の言葉で表現することができた。今後は、『深い学びの在り方』について、①自分とは異なる考えを理解するためのグループ活動を充実させること、②統合的・発展的な見方や考え方を育むために、分類・整理することを軸とした授業づくり、③グループ活動の活性化や、子どもが見通しをもつために、課題の設定と提示について吟味することを課題として、研究を続けていきたい。

小学校3年2組 兼安 陽一郎

## あまってい～Ｙ〇～あまりのあるわり算～

ゲーム活動を通して、余りと除数の大きさの関係に目を向けながら、余りは除数より小さいことを捉えることができた。問いのつかませ方が、今後の課題である。



小学校5年1組 伊藤 悠樹

## “Team 〇〇” 整数を仲間分け ～整数の性質～

整数を順々に3グループ・4グループ…と分けていく中で、できたグループの特徴を捉えた。統合的な見方・考え方を働かせる手立てが課題となった。



# 理科

小学校4年1組 赤星 冴

## 人体ふしぎ発見！ ～「人の体のつくりと運動」～

モデルを用い、筋肉が収縮・弛緩する様子を捉えることで、拮抗関係を見出すことができた。実験結果と引き出させたい事実とが繋がるよう手立てを考えていきたい。



小学校6年2組 宮崎 洸佑

## 6年生スペシャルてんびんをつくろう！ ～「てこのはたらき」～

てこのはたらきとてんびんとを関連付け、支点からの距離により傾きが変わる理由を話し合った。学ばせたい問いと、子どもが生んだ問いとが重なることが課題である。





# 音楽科

小学校 2年2組 門田 集二

## ポルカの楽しさを表そう ～「山のポルカ」の合いの手づくり～

声、手拍子、鍵盤楽器と段階を踏むことで、旋律の合いの手をつくることができた。しかし、2年生段階では、リズムに絞った音楽づくりの方がその働きへの理解が深まり、有効であった。



中学校 3年2組 金光 修一

## 「学年テーマソングの副旋律を創作しよう」

学年テーマソングの主旋律のサビの部分の音の動きや歌詞の様子に合わせてより効果的な副旋律を創るという授業を行った。

これまでの創作活動で、曲作りはこなしてきたが、主旋律に合った副旋律を創作するという活動は、レベルが高く、まだ多くの創作体験が必要だと感じた。

生徒は、難しいと感じながらも、ペア班を交代し、それぞれの班でハーモニーやリズムを工夫する活動を行い、中には、豊かな発想力で、素晴らしいアレンジをした班もあり、創作力が若干ではあるが、身につけてきているように感じた。



# 図画工作科・美術科

中学校 2年2組 曾根 唯之

## 「Happy ランプシェード」

本教材で、光や明かりの性質を体験的に理解することで、身近な生活の中に特別な空間を光で演出することができるようになる。

鑑賞と体験活動を通して、光の見せ方やその性質についての情報を収集し、これらの情報を再度検討することで、より良い表現へと結びつけることができた。しかし、本番は陶芸粘土のため、紙で試行錯誤するだけでは限界があった。

光のもれ方を試行錯誤



試作品の制作



# 体育・保健体育科

中学校 3年1組 高木 菜満恵

## 「ソフトテニス」

3つの道具を使用し、タブレットを用いて道具や技能の比較をすることを通して、返球のポイントを見出す授業を行った。

道具による手から面までの距離の違い、面の大きさや角度、体の向き工夫など、各班5つくらいのポイントが表出された。しかし、頭ではそのポイントが理解できていても、実際自分の体で行うとなると難しかったようだ。理解したことが技能として身に付けられるよう段階を追った授業の展開が課題である。

また協議では小学校との一貫性・系統性についても話題があがった。



小学校 6年1組 田中 歩

## つないで！攻めて！ 6の1グリッドバレーボール！ ～「ネット型」～

連携して攻める集団の動きと自他の位置取りとを関連付けて、課題に合った解決方法を見出すことができた。運動量の確保や技能の習得が、今後の課題である。



# 家庭科



# 外国語活動・外国語科

中学校 1年2組 河村 尚代

## 私たちの食生活 ～バランスの良い食事について考えよう～

子どもたちは、これまで1日に必要な食品の種類と概量について学んできた。その中で、日本人が摂取することが少ない食物繊維に視点を向けさせ、「健康」にかかわる見方・考え方を働かせて、給食の献立をたてるという授業を行った。

便秘の児童のデータを見たり、食物繊維を可視化したりし、子どもたちの興味・関心を高めることができた。また、子どもは食品成分表や給食の献立を用いて、自ら給食の献立を立てることで、科学的な根拠を基に思考を深めた。しかし、資料やデータの提示の仕方や、生徒の意見をどう捉えて課題解決に導いていけば良いかなどが課題となった。



小学校 6年2組 宇田川 祐子

## おいでませ光 ～ I like my town. & Turn right. ～

ふさわしい表現を選んでやり取りをしたり書いたりすることで、光市の魅力を具体的に伝えることができた。やり取りの際のツールの在り方が、今後の課題である。





# 社会科

中学校 1年1組 関本 努

## 「古代までの日本」

本授業では、聖武天皇が大仏を建立した理由を考察することを通して、古代の権力者が宗教を利用して政治を行っていたことを理解することをねらいとした。成果として、学習課題を日本国内の視点のみで考えるのではなく、当時のアジアで大仏が造られていたことを提示したことで、子どもの空間軸は広がり、アジアにおいて仏教が外交政策の手段の一つであることに注目することができた。今後も、中期の学年段階において、“必然”と“可能”をキーワードに研究を進めていきたい。

中学校 1年1組 岩本 正信

## 「現代社会とわたしたち」

授業では、少子化対策担当大臣として、少子化に取り組むとしたら、どのようなことに取り組んでいくかということを考えることを通して、現代社会の特色を理解することをねらいとした。成果としては、生徒が表出した意見が、保育施設の充実という短期的な対策から地方の環境支援などのような長期的な対策にまで広がったことである。また、表出された政策についても優先順位をつけるということから重層的に捉えさせることができた。後期の段階では、一般的(原理)と固有(状況)を行き来しながら研究を進めていく。

小学校 5年2組 才宮 大明

## 光から世界へ

～鉄からさぐるわたしたちの生活と工業生産～

中小工場の製品の種類が増加した事実から、社会の変化に応え、世界へ届ける生産者の努力を捉えた。問いを得た後、より高い学びに向かうための手立てが課題である。



# 特別の教科 道徳

中学校 2年1組 藤永 啓吾

## 「ルールとマナーの意味」

公共の場におけるルールやマナーを、大人としての視点から捉え直しながら、社会における人間としての在り方や生き方を考えた。

現在、発達を考慮した段階的な指導の手立てを研究しており、中学2年生の発達を踏まえた授業展開や発問、支援の在り方等を見出すことができた。



小学校 2年1組 久保田 高嶺

## みんながつかうものだから

～「黄色いベンチ」～

動作化を通して心情の類推や生き方の吟味をすることで、自律的な考えのよさを捉えようとした。そのような活動を、思考に沿って取り入れていきたい。





# 総合的な学習の時間

中学校 1年3組 中村 哲哉

## 「室積地域のもつ価値を探ろう」

本授業では、フィールドワークを基に感じた光市や室積が抱える課題を把握し、解決策を考えることをねらいとし、授業を行った。

過去に建設予定であった鉄道の路線図を提示することで、その時代に室積が大切にしていた漁業などに目を向け、室積のもつ価値について考えることができた。今後は、小中の発達段階に応じて、どの学年で、どのレベルまで学ばせていくのか、ゴールをどのレベルにするのかを明確にしていくことや考えた解決策が提案で終わるのではなく、自分たちが行動できることを探し、行動につなげることができる子どもを育てていきたい。



小学校 3年1組 國重 裕美

## ぼくらにもできるかな ～地域のためにできること～

地域の特徴を表したカルタの作成に取り組む方々の思いや願いを探り、自分たちにもできることを話し合った。自分事にしていく手立ての充実を目指している。



## 公開授業研究会のお知らせ

6月の研究発表大会では、多くの方に御参会いただき、ありがとうございました。たくさんの御意見や御助言を基に、研究を進めることができました。

研究発表大会での成果と課題をうけて、「見方・考え方が働く『問い』を子どもがつかむためには」という研究の視点で公開授業研究会を行います。Webページにて詳しい内容のお知らせと受付を行います。多くの方の御参会をお待ちしています。よろしくお願ひいたします。

### 日程

- 第1回 1月28日(月) 13:25～
- 第2回 1月31日(木) 13:25～
- 第3回 2月 8日(金)
- 公開授業Ⅰ 13:25～14:15
- 公開授業Ⅱ 14:25～15:15
- 研究協議 15:30～16:30

第1回は、国士館大学 澤井 陽介先生も来校されます。



# 発刊にあたって

## ～本校の研究について～

本校は、平成30年度に小中一貫校としてスタートしました。長年続けてきた小中連携教育研究で得られた知見をベースに、三つの特徴をもつ研究活動を実践しています。

### 「めざす子どもたち像」の共有

一つ目は、小中の教職員が「めざす子どもたち像」を共有することを大切にしています。今後、子どもが社会に置かれるであろう状況や、本校の子どもの現状や課題を踏まえ、「知を愛する」子どもたち（知の探求者）と「共にある」子どもたち（共同参画者）を育てるという二つの側面から、子どもの学びと育ちを捉えることを大切にしたいと考えています。

### 「小中一貫カリキュラム」の開発

二つ目は、「めざす子どもたち像」を実現するためのカリキュラムの開発に向けて改善を重ねています。本校は小中施設一体型であると共に大学の附属校であり、これまでも小中連携研究の蓄積もあります。これらの特徴や歴史を軸に、小中教職員の協働による小中一貫カリキュラムの開発を行い、子どもの学びと育ちを捉えようとしています。一昨年度から、資質・能力、教材・配列、見方・考え方等で整理した三層からなるカリキュラムを作成し、小中9年間を見通した教育を進めようとしています。

### 「共有知見型研究」の推進

三つ目は、全体論を立てて、その実現を各教科でめざす「理論先行型研究」を改め、研究授業から見えてきたことを語り合い、共有する「共有知見型研究」を推進しています。また、「研究授業の実施→結果の分析の教職員での共有→カリキュラムの見直し→次の研究授業の実施」というサイクルを、小中教職員でグループを組んで行っています。

秋号におきましては、上記の取組から見えてきた成果や課題に言及しながら、各教科・領域ごとの内容を掲載しました。ご一読の上、ご意見やご示唆を頂戴できれば幸いです。皆様には今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げます。発刊のご挨拶とさせていただきます。